

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530946

研究課題名(和文) 教職大学院と公立小学校の協働による「若年教員」の授業力向上過程に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical study on teaching skills improvement process of "the young teacher" by the combination with a teaching profession graduate school and the public elementary school.

研究代表者

瀬戸 健 (Seto, Ken)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：30510036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、若年教員の授業力向上過程を明らかにしようとするものである。授業者の授業力分析で着目したのが教師の応答行動としてのリヴォイシングであるが、初任者は多くの発言に反応しようとし、単純な復唱が多かった。しかし、教職経験を重ね教材の理解が深まったりねらいが明確になったりすると、子どもの発言から適切な言葉を選ぶ、違った表現をする、要約する、意味付けや例示を求めるなど様々な機能をもつ言葉でリヴォイシングを行うようになっていくことが分かった。

研究成果の概要(英文)：This study is going to clarify teaching skills improvement process of the young teacher. It is the re-voicing as the reply action of the teacher that paid its attention in teaching skills analysis of the person of class in this study. The beginning teacher was going to react to the remark of many children, and there were many simple repeats. But after young teachers spent several years as the teaching profession, their re-voicings changed to concisely and clearly. Because they understood deeper about materials, aim and strategy of class activities.

研究分野：教育経営 教師教育 校内研修

キーワード：授業力向上 リヴォイシング 教材研究 発問

1. 研究開始当初の背景

2010年の文部科学省の統計によれば、現在、公立学校教員の7割が40歳以上である。このことは、10年後に現在の初任者や若年教員が間違いなく各学校の中核を担い、教育活動を推進していかなばならなくなることを意味する。若年教員の力量形成、とりわけ授業力の向上は、わが国の学校教育の維持・向上を考えると、喫緊の課題であると言えよう。

さらに、若年教員が熟練教員へと成長する道筋を明らかにできれば、初任研や若年教員研修、大学での教員養成教育改善の契機となりうる。わが国は、戦後改革期以来、教員養成を巡って「開放制」か「閉鎖制」か、「目的養成」か「非目的養成」か、最近では「アカデミックな養成」か「実践的指導力」かについて長く論議された歴史がある。教員が成長する過程という具体的な事実の提示は、二律背反的な論議を新たなステージへと押し上げる原動力になると考えている。

2. 研究の目的

本研究では授業力向上に着目し、初任者から概ね教職経験6年目までの教員(以下、若年教員)を対象に、どのようにして熟練教員へと成長していくのか、その過程を明らかにし、若手教員研修プログラム開発の基礎的研究とすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究には、暗黙の前提として「若年教員の授業力向上」が図られるであろうという傾斜がある。これは実践研究に由来する弱点であり、授業力評価にあたっては、客観性を担保するために細心の注意が払われる必要がある。本研究は、若年教員の授業力向上過程を明らかにするという目的から、定期的な授業力の形成的な評価が欠かせない。そこで、授業力評価の方策として、特にリヴォイシングに注目した評価を行うこととする。

4. 研究成果

(1) 教職1年目の授業力を確認する

まず、初任教員の授業力が、どのようなものであるか確認するため、初任者の授業をリヴォイシングの観点から分析を行った。調査にあたっては、授業を教室の前及び後方からそれぞれ1台ずつのビデオカメラで記録し、授業記録を作成した。授業映像記録は、平成25年1月から2月の間に、T県T市小学校長会の協力を得て8名について1時間ずつ行い、話し合い活動が期待できる国語科の説明文と物語文の学習、社会科の授業を本研究のデータとした。ここでは国語科の実践を述べる。

リヴォイシングの形態については、枠組みをつくらず、授業記録で見いだされるリヴォイシングについて、瀬戸と松井2人が別々に分析を行い、一致した発話の機能を記述することとした。リヴォイシングであるかどうかについても同様の手続きをとった。一致しな

いものは排除した。結果は、次のようである。

4年国語科「ウナギのなぞを追って」

授業は、説明文「ウナギのなぞを追って」を読み、形式段落ごとに見出しをつける学習である。前半は、児童一人一人が自分なりに作品を読みワークシートに見出しを書き込んでいる。授業の後半は、その見出しを交流する場面である。授業開始から27分50秒から交流が始められ、その冒頭でのリヴォイシングの状況は表1のようになった。

児童の発言を受けて、教師はT53のように児童の発言を2回繰り返しながら板書している。おそらく無意識に繰り返したのであろう。しかし、児童は、教師が2回も繰り返して板書までしたのでそれが重要な内容であるととらえ、でその見出しをノートに書くのかと尋ねている。同様にでは、「毎年行く目的」という発言を受け教師は2回復唱しながら板書している。これらのリヴォイシングの機能は、「確認」であり、2回繰り返すのは正確に板書しようとするときの当該教師の癖なのであろうか。

これに対し、T56では、前半の「マリアナの海はどこにあるか」と確認の復唱をし

表1 形式段落ごとに見出しについて

分.秒	教師の発話	児童の発話
27.50	T51: はい、1段落からいきます。じゃ、1段落、どんな見出しをつけましたか？あ、結構いる。はい、はるおくん。 T52: はい？ T53: 場所と目的。場所と目的。(話しながら板書する) T54: 書かなくていいよまだ。はい、けいたくん。 T55: 毎年行く目的、毎年行く目的。(話しながら板書する) はい、ほかにもあった？何か、目的が2回出ているね。はい、だいすけくん。 T56: マリアナの海はどこにあるか。場所に関連してくるよね。はい、しんじくん。 T57: これから何をするか。何かもうだいぶ多いんだけど。ははは、まりかちゃん。	C: 目的？ C: ①場所と目的。 C: ②先生、それ書くの？ C: ③毎年行く目的？ C: ④マリアナの海はどこにあるか。 C: これから何をするか。
29.10		
44.30	T116: 研究の第一歩っていうの？どうしてそう思うの？ T120: すごいね、ちゃんと理由が言えてるね。今のちゃんと聴いた？ T121: 聞いてないよね。はい、ウナギの研究の第一歩。この言葉には、たまごを見付ける調査が始まったことも含まれているし、どれくらいかかったかもかかわっているんだよね。(後略)	C: 答え。 C: 研究の答え。 C: 研究の第一歩 C: 聞かなかった。

ながら、「場所に関連してくるよね」と述べ児童に新たな観点を与えながら他の発言引き出し、それらを位置づけようとする意図が見えている。しかし、児童には伝わっていない。同様に T57 でも確認の復唱を行い、「何かもうだいぶ多いんだけど」と児童の発言が多いことを述べている。意見を整理することへの不安の表明のようにも思われる。

授業の最終盤では、これまでにみられなかった種類のリヴォイシングが行われている。T116では、児童の発言である「研究の第一歩」を復唱しながらも「研究の第一歩っていうの？どうしてそう思うの？」と問いの背景を

尋ねている。考えの背景が児童間で共有できれば、さらに多様な考えが出てくることをねらったのであろう。そして、T120では、その理由を答えた児童を賞賛するリヴォイシングをしている。しかし、ここでも児童の集中力が切れてきており、多様な考えを引き出すことに成功していない。最後は教師自身が説明することになってしまっている。

第3学年国語科「ちいちゃんのかげおくり」

単元の導入から2時間目の授業である。授業の冒頭で作品を音読し、その後、初発の感想を発表し交流することを意図した授業のようにとらえられる。交流に際して授業者は、「今日は、いろいろな人の感想を聞いてみたいと思います。聞いていく中で自分と比べてみてください。いつもしっかり聞いているみんなならよく聞けると思います」と児童に期待を述べている。この発言からは、自分と友達との比較を通して自分や他者の読みの固有性に気づかせたいととらえられる。リヴォイシングの観点から言えば、だれの考え(発言)かという「著者性」が明確になる場面があると思われたが、リヴォイシングの実際は、表2のようになった。

で児童は、よかったと思うところとして「おじさんと逃げたところ」を挙げている。T26では、教師は板書するためにの発言をもう一度言ってくれるよう求めている。その際、の発言では、「知らないおじさんと一緒に逃げた」という事実が述べられたのに、T27では、「逃げられてよかった」と復唱され、「お母さんと？」と語尾上昇で発言の継続を求められたので、児童は、「お母さんとはぐれた」と発言している。さらに、T28では「～はぐれたところが？」と語尾上昇で尋ね、「悲しかった」を引き出している。

児童の読みの固有性を引き出すのであれば、「よかった」という感想をリヴォイシングするのではなく、児童が発言している叙述の「知らないおじさんと一緒に逃げた」とい事実を取り上げるべきではなかったか。さらに、T29では、児童の挙手に対して「似ているの、広野さんと」という言葉が返されている。「似ている」は、発言内容の他者との関係性を表しているが固有性は出にくい。本来なら、「広野さんと同じ場面を取り上げた人は」と叙述を取り上げ一人一人の固有で多様な意味づけを引き出すべきではなかったか。

同様の傾向が授業の後半部でも見られている。では、児童は「ちいちゃんの命が空に消えた」という叙述を取り上げて、それは死んだということであると意味づけ、そして「すごく悲しかった」と述べているのに、教師は「すごく悲しかった」というところしか復唱していない。またでも、「うれしくて悲しいお話」とその子しか表現できないような言葉が発せられているのに、「悲しいお話だと思った」と復唱され、「5段落だけ？」と話題を広げる補助発問が続く。そして、児童が「ちいちゃんはこのとき、お母さんお父

さんと一緒だったと思います」と「うれしくて悲しい」の根拠を述べているのに「おとう

表2 「ちいちゃんのかげおくり」初発の感想について

分.秒	教師の発話	児童の発話
16.18	T26: なるほどね。ごめんね、広野さん、おじさんが出てくるところ、もう一度言ってくれる？	C: ①よかったと思う場面は、知らないおじさんと逃げたところです。私が悲しいと思った場面は、ちいちゃんがお母さんとはぐれたところです。
	T27: 逃げられてよかった。あともう一つ言ってくれたよね。お母さんと？	C: ②知らないおじさんと、知らないおじさんと一緒に逃げた。
	T28: お母さんとはぐれたところが？	C: お母さんとはぐれた。
	T29: 似てるの？広野さんと似てるよっていう人？付け足してくれる人？じゃあ自分の言葉で言ってみよう。田村さん。はい、どうぞ。	C: ③悲しかった。 C: (別の児童が挙手) C: (挙手あり)
34.12	T60: すごく悲しかった。はい、りおさん。	C: ④すごく悲しかった。ちいちゃんを見つけたのに、ちいちゃんの命が空に消えたっていうことは、ちいちゃんが死んだのがすごく悲しかった。
	T61: なるほどね。悲しいお話だと思った。悲しいお話だと思ったのは5段落だけ？全部を見て？なるほどね。それからちいちゃんはおとうちゃん、おかあちゃんだけ、りおさんは会いたい？こわいよ。そうかそうか。	C: ⑤心に残ったのは5段落です。ちいちゃんの命が消えたことが一番悲しかったです。うれしくて悲しいお話でした。ちいちゃんはこのとき、お母さんお父さんと一緒だったと思います。

ちゃん、おかあちゃんだけ、りおさんは会いたい？」と全くずれたリヴォイシングになってしまっている。

このようなずれは、教師が児童の感想に拘泥しすぎており、一人一人の固有性は、同一の叙述の読みの違いとして表現されることを理解していないことに起因すると考えられる。教材研究の手法が学ばれていないのではないか。

リヴォイシングからみた初任者の授業力

- ・児童の発言をそのまま復唱する、確認のリヴォイシングが多い。単位時間当たりの児童の発話数と、教師の発話数とが拮抗している。これは、教師が児童の発話のほぼ全てにリヴォイシングをしていることを示している。つまり、授業が一問一答型になっており、児童同士が互いの発言や考えに対して意見などを言い合う話し合いにはなっていない。強いて言うなら、「発表」の授業であろう。
- ・児童の発言をその意図までとらえて正確に復唱することは、初任者には難しい。例えば国語科では、児童の発言を正確に聞き取るには、教材の解釈に沿った鋭い言語感覚が必要になる。
- ・単に復唱するだけでは、リヴォイシングの機能は発揮されない。根拠や理由を尋ね、多様な考えが出されて話し合いが活発になる。リヴォイシングを生かそうとする教師の意図が重要であろう

(3) リヴォイシングからみた授業力向上過程

ここでは、教職経験6年目のA教諭の授業記録をもとに、リヴォイシングの変容について記述する。A教諭については、教職2年目(平成22年度)から4年目(平成24年度)の末まで3年間、算数、道徳、体育などの教科で年に2~4回の授業映像を撮りつづけてきた。しかし、平成24年6月までは、初任者とほとんど変わらない授業状況が続いた。ところがわずか3ヶ月後の9月の授業ではリヴォイシングの状況は劇的に変容する。表6表7をもとに考察を加えることにする。

第5学年社会科「さかな不思議発見」「私たちの生活と環境」

表3 「さかな不思議発見」の実践から(平成24年9月実施)

分.秒	教師の発話	児童の発話
3.12	T16:先生実際に、これお店でいくらくらいになっているのか東京で見ました。 T17:北海道産、いくらくらいだと思います? T18:2千円くらい? T19:じゃあ、みんな400円より高い予想だな。 T20:スーパーで実際いくらだったか。 T21:平均で大体ね、これくらいでした。(東京のスーパーの値段「2500円」と板書) T22:どうこれ、高いと思う人。 T23:今日みんなに考えて欲しいのは、同じカニだよ、漁師さんが捕ったカニ、スーパーのカニ、 <u>何でこんなに値段違う?</u> (課題漁師の売り値とスーパーの売り値、なぜこんなに違うのだろうを板書) T24:売り値が違うのは何か理由があるのかな? T27:漁師が安くしている。 T28: <u>どういうこと?それは。</u> T29:あ、漁師さんが売れば良い。 T30:漁師さんが安くしている、なるほど。 T31:漁師さんが安くしているの?わざわざ。他に、A君。 T33:⑥北海道の方がたくさん捕れて、東京では貴重ってことか。	C:①2千円。 C:3千2百円くらい。 C:1千5百円くらい。 C:1万円。 C:うわあ。 C:高い。 C:え、④漁師が安くしているから? C:うーん。 C:安い値段で、うん。 C:④漁師さんが売れば良い買ってもらえればって。 C:えっと、⑥北海道の方が多く捕れる。その一部を東京に持ってきているから高いと思う。

この授業では、表3のように教師の意図が明確に出るリヴォイシングになっている。

まず、教材とした北海道産かのに値段に興味を持たせるためT18で1回だけ「2千円くらい?」と復唱し、その後の多くの児童の発言にはかかわっていない。そして、たくさんの値段の予想をT19「400円より高い予想」と言い換え、生産地の値段より高くなることを印象づけようとしている。その上でスーパーの値段を知らせ、その値段の違いを「なんでこんなに値段違う?」と児童をその理由を検討する話し合いに誘っている。

その結果、水揚げのころでは④漁師さんが売れば良いから安くしている。東京のスーパーについては、児童は⑥「その一部を」と発言したのに教師は、T33で「東京では貴重」と分布的な観点を入れたまとめを児童に返している。

教師が意図的にまとめた別の言葉で表現したりするリヴォイシングは、表4に示す平成25年2月の実践でさらに顕著になる。

この授業では、冒頭に桧の小さな塊を出して児童の興味を引くとともに、木材の値段について予想させている。しかし、児童が様々な予想するC27~C32の発言には、教師は全くリヴォイシングをしていない。逆に、T22以降ではC37「値段?」と単語での児童の答えに教師はT24「木材1本あたりの値段の変化」とグラフ名を正確にリヴォイシングしているし、出典についても、C48、C49などの「りんや」「はやしの」に対してもT28で「りんや庁」と正確な読みをリヴォイシングしている。これらのことから、教師には、正確にグラフを読む指導を先に行い、素早くグラフを

表4 「私たちの生活と環境」の実践から(平成25年2月実施)

分.秒	教師の発話	児童の発話
2.25	T20:もうちょい高いと思う。 T21:5万円くらい。じゃあちょっと、これ見てみてよ、これ。 T22:これ何のグラフ? T23:ヒカルくん、これ何のグラフですか? T24:木材1本あたりの値段の変化。 T26:縦は何表してんの? T27:これはどこが作ったデータなの?どこから資料集めたの? T28:これ読めない?りんや庁っていうの。 T29:こういう、森林のことについて、お仕事しているところ。どうですか?これ見て、気づいたこと、感じたことある人? T31:木がめっちゃくちゃ安くなってる。桧はだいたい、いくらくらい? T32:2000円くらいだな。昔はどうだった? T33:おぉ、11000くらい。 T34:下がっていつてる。1本2000円です。 T41:じゃあさ、なんでこんなに、下がって来ちゃったの? T44:今、こんな。2000円。 T45:リュウタくんどうぞ。 T46:じゃあ、木がたくさん余ってるってこと? T47:木が余ってる。 T48:なんで木が余ってるの? T50:あんまり買わないっていうのは、あんまり?売れないってこと?使わないってこと?	C26:5万円くらい。 C27:2千万 C28:40万くらい。 C29:木、最近、値上がりしてんじゃん。 C30:※※※万くらいするだろう。 C31:100万くらい。 C32:何千万円。 C37:値段? C43:円 C44:2000円、えっ? C45:面積。 C46:値段。 C48:りんや C49:はやしの? C50:はやしのちょう。 C52:林野庁? C53:木がめっちゃくちゃ安くなってる。 C54:2000~3000円くらい。 C55:2000~ C56:すげー高い。12000。 C57:1番高い時で。 C68:まったく違うよ。 C72:確かに。 C75:はい。みんないっぱい作ってる。 C77:同じようなのを、いっぱい作るから、その1本の値段がどんどん下がってくる。 C79:どうだろう? C86:はい。みんなが木を、桧とか杉の木を買わないから、木が余って、もっと売れるように安く。 C91:でも家とか結構建てるじゃん。 C92:けどだいたいコンクリート。

読める児童だけでなく全ての児童が学習に参加できるように、その意図に合う発言だけにリヴォイシングしたとみることができる。

グラフの読み方を指導した後は、木材の値段に関する発言にさかんにリヴォイシングし、木材の値段が下降している事実をつかま

せている。そして、主発問である T41「なんで、こんなに（値段が）下がってきたの？」につなぐことに成功している。主発問以降、児童からは「同じようなのをいっぱい作るから」「木が余っている」や最近の住宅の原材料にまで話題が広がっていった。

A 教諭が明確に授業力向上を見せたのは、実は「米作りのさかんな庄内平野」の単元からで、休日に現地に出かけ取材を行ったことが契機になっている。事実を正確に調べ、自信をもって授業に臨めるようになった。その後の授業も現地調査を欠かしていない

(4) 授業力の停滞

B 教諭は、A 教諭と同じ学校に勤務し、教職経験もほぼ同じであることから、校内でも二人をライバルとして見る雰囲気があった。

本研究開始前から B 教諭も、すでに私たちの支援を受けて国語科の実践を中心に授業力向上に取り組んでいた。第3学年を担任し、伸びやかな実践は、A 教諭と比肩するものと目されていた。しかし、第5学年の担任となつてからは、状況は一変した。

表5 第5学年国語 「千年の釘にいどむ」(平成24年12月実施)

分 秒	教師の発話	児童の発話
19. 11	T 15 どうしてそういう題名にしたのか。 T 16 どうして、そういう題名にしたのか、その時に、教科書のここにかいてあったよ、何段落のここにかいてあることが書いてあったから、僕はこういう題名にしてみましたっていうのを、ちょっと、10分まで、10時10分まで、時間上げますから、ノートに書いてみてください。はいどうぞ。 T 17 それに理由を書いて。 T 18 それでね、一つじゃなくていいです。こういう題名もいいんじゃないかな、こういう題名もいいんじゃないかな、いっぱい考えてみて。これは？どうしてこういう言葉が出てきたか、自分の言葉で書いてごらん。これすごくいいよ。	C 12 オッキーオッキー。 C 13 先生、こんなんでもいいの？ C 14 理由わかる。 C 15 比べていいの？
24. 58	T 34 では、お隣の人に、自分の意見を教えてあげてください。僕はね、私はね、こういう題名にしてみました。それはなんでか。理由はね、こういう理由なんだよ、というのを隣の人と伝え合ってください。それで、なるほどと思ったら、いいね、どうしてそう思ったの、もっと聞いてください。そうすると教科書のこういうところに書いてあったよ、ほら見てごらん、と教えてあげてください。いいでしょうか。どうしても意見が出なかった人はそのお友達の意見を聞いて、ああなるほど、じゃあ私だったらこうするな、というのも付け加えてみてください。 時間3分あげます。はいどうぞ。お隣の人とノートを見せ合ってお話してください。見せるんじゃないで、自分の口で伝えなさい。見せるんじゃないで、自分の口で伝える。しっかり自分の口で、隣同士で伝える。	C 23 見せた。
27. 54	T 35 見せ合うんじゃないで、口で伝えて。ダメ、やっ。見せるのダメ。自分の口で言いなさい。 T 36 あなたは今、お隣さんとやるの。□□君もお隣さんとやっ。お隣とやった？もっと質問してみて、どうして、どこでそう思ったのとかもっと質問して。	
28. 15	T 37 はい、ではいいですか。はい、座ってください。 T 38 机も整理して。	
	T 41 題名にしました。それで理由は？ T 45 『作れるのか』というところから、『千年の釘を越える』というのにしました。』というところまで言ってください。	C 27 千年の釘を越えるっていう…。 C 28 うん、はい、153ページ12行目、13行目の、古代の人に負けないもの。

表5は、「千年の釘にいどむ」という説明的文章を教材とし、表題「千年の釘にいどむ」を参考に、一人一人が自分なりの題名をつけるという学習活動が展開されている。その際、

教師は「何段落のここにこういうことが書かれてあったから、僕はこういう題名にしてみました」と具体的に説明をしながら、理由をつけることを求めている。

実際に活動が始まっても、児童からは「こんなんでいいの」という質問が出され、教師は「それに理由を書いて」と改めて指示している。T34でも、丁寧な説明が目を引き。「お隣の人に自分の意見を教えてあげてください。」といい、さらに「なるほどと思ったら…もっと聞いてください」や「私だったらこうするな、というのを付け加えてみてください」ということも加えて、ペア学習の仕方について指導している。

T35では、指示に従わない子を繰り返し叱り、T36も隣ではなく、前後の子と学習を進めようとする子に注意を与えている。

これが2学期末の学級の状態であるが、この状態はその3ヶ月後の三学期中でも同様に見られている。例えば、指名した子には「座ったままでいい」や「大きな声で、はっきりと」など、発表の仕方について指示が出ていし、単語だけで発表した子には言葉を補って、文として発表するよう促している。これらは、学習習慣に関するものである。

このように見てくると、B 教諭の5年生での授業は残念ながら向上が明確に見られず、「停滞」しているように見える。それは、学級の状態に起因しているのではないかと。3年生に比べて、5年生では明らかに良好な学習の経験が不足していて教えなければならないことが山積しているように推察できる。担任は年度の初めから様々な方法でその不足を補おうとしたのであろうが、授業記録からは児童の成長が十分にはとらえられない状況である。

(5) 研究成果と課題

成果

・教職経験を重ねてきているA 教諭のリヴォイシングを例に考えてみる。教職経験の経過とともにリヴォイシングは減少しているが、児童の発言は飛躍的に増加し授業は活発化している。また、実践ではリヴォイシングは、意味付けをめぐって話し合うための事実確認と、事実に意味づける時の各児童固有の発言に向けられており、授業は社会科としての目標を達成している。このようなリヴォイシングができるのは授業意図が明確だからであろう。「指導内容の理解」、「教材研究」の充実がリヴォイシングを効果的にし、有効な授業を可能していると言える。

・リヴォイシングは、授業力の向上とともに単純な復唱から、別の言葉での復唱に変化していく。それは、例えば問い返しや要約などであり、そのことによって児童の思考は、本時の課題にせまるものとなっていく。

課題

授業力の停滞は、大きな課題を突きつけている。つまり、学級の状態や学習履歴が悪い

と若年教員の授業力が向上しない可能性があるということである。学級の状態改善のために教師「学級集団の制御」や「学習習慣の形成」などについては手立てを打ち続けなければならない、若手教員にそれらを望むのは厳しい。教材研究は無理になるであろう。

今後は、これらの課題を視野に入れながら、より確かに教員の授業力を測定できる手法を考案し、授業力向上過程の研究をより深めていきたいと考えている。

参考文献

1 秋田喜代美ら(1991)「教師の授業に関する実践的知識の成長」- 熟達教師と初任教師の比較検討 - 日本発達心理学会 『発達心理学研究』第巻 第2号 pp88-98 1991

2 一柳(2012)『授業における児童の聴くという行為に関する研究 - パフチンの対話論に基づく検討 - 』風間書房 2012

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

明園 愛実、瀬戸 健、熟達教員と若手教員の子供のみとり能力に関する比較研究 - ノートの記述からのみとりを中心に -、上越教育大学教職大学院研究紀要第3巻、2016、43 - 51

松葉 大吾、勝海 由里子、水落 芳明、授業研究において研究主任の働きかけが授業者に与える効果に関する事例的研究、上越教育大学教職大学院研究紀要第2巻、2015、93 - 104

瀬戸 健、近藤 誠、授業中における若手教員の応答行動は教職経験によってどのように変容するか、上越教育大学教職大学院研究紀要第2巻、2015、41 - 51

松井 千鶴子、総合的な学習を重視するA小学校における教師の力量形成に関する事例的研究 - 赴任初年度の教員を対象にした PAC 分析による探究的な学習のイメージから -、教育大学教職大学院研究紀要第1巻、2014、159 - 169

高詰 淳一、瀬戸 健、若手教員の実践的指導力の向上に関する教授学的研究 - 「教材研究」を基盤とした「待ち受け」の視点から -、上越教育大学教職大学院研究紀要第1巻、2014、65 - 74

瀬戸 健、水落 芳明 小学校入学時における学級集団の制御に関する事例的研究、上越教育大学教職大学院研究紀要第1巻、2014、75 - 84

〔学会発表〕(計1件)

瀬戸 健、若手教員はどのような道筋を通して授業力を伸ばすか 日本学校教育学会第31回大会 2016、名古屋市立大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬戸 健 (SETO, Ken)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：30510036

(2) 研究分担者

早川 裕隆 (HAYAKAWA, Hirotaka)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：90590365

松沢 要一 (MATUZAWA, Youichi)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：10401788

水落 芳明 (MIZUOCHI, Yoshiaki)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：40510053

松井千鶴子 (MATSUI, Chizuko)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：20401789

辻野けんま (TSUJINO, Kenma)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：80590364

堀 健志 (HORI, Takeshi)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：10361601

久保田 善彦 (KUBOTA, Yoshihiko)

宇都宮大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90432103

金子 淳嗣 (KANEKO, Atsushi)

新潟大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30609186

清水 雅之 (SHIMIZU, Masayuki)

上越教育大学・学校教育実践研究センター・准教授
研究者番号：10547053